『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第２６回】

前回は、神からいただいた〈賜物〉を私たちが互いに分かち合うことの大切さを書きました。「わたしには〈賜物〉なんて、与えられているのかな？」とお思いの方。心配なしです。聖書には『人はそれぞれ神から賜物をいただいている』（『コリントの信徒への手紙』７章７節）とあります。安心してください。

きょうから、**『わたしが・棄てた・女』**の最大のヤマ場に入ります。ミツという一人の女性の人生は、私たちにどんなことを遺してくれたのでしょう。

（※お願いが一つ。今回から、この小説の一番の読みどころが続きます。そこで、**『わたしが・棄てた・女』**をまだお読みになっていない方は、わたしの拙文はここまででストップしていただき、**『ぼくの手記（七）』**だけでも、先に読んでいただければと思います。あとで小説を読むと、試合結果がわかっているスポーツのビデオを観るとか、犯人がわかっている推理小説を読むのと同じことになります。この小説がわたしたちに**〈回心〉を促す**感動のクライマックスを味わうためにも、お願いいたします。）

『ぼくの手記（七）』　（p.236～255）

新婚旅行で乗った御殿場行きのバスが、会社の慰安旅行で通った道に入ったとき、雑木林の中にあるハンセン病の病院の話がでました。長い間、記憶の奥底に埋もれていたものが吉岡の胸によみがえってきました。雨の日、川崎の喫茶店で「御殿場にいくの。」と言ったミツの顔でした。『（ミツは、 … 雑木林の中にいるのだな。）』と思ったものの、マリ子と結婚した今、『この小さな幸福に関係ないこと、そこに暗い影をおとすようなことは、自分にはいっさい無縁にしようと考え』る吉岡でした。

年の暮れ、吉岡は余った年賀状の１枚に「謹賀新年　病気の恢復を祈る」と書いてミツに送りました。なぜ、彼が年賀状を送る気になったのでしょう。『自分が今、にぎっている幸福に比べて、川崎で会ったミツの姿が、あまりに惨めで、可哀想だったからかもしれない。たしかに、あの時の気持には、あの娘に対する憐憫の情がふくまれていた。それは一時的な衝動ではあったが、憐憫は憐憫にちがいなかった』と、吉岡はふりかえります。

ミツからの返事はありませんでした。ある朝、アパートのおばさんから１通の封書を受け取ります。差出人は「スール・山形」、住所は「御殿場　復活病院」とありました。その日の夕暮、吉岡はビルの屋上で手紙を開き、衝撃を受けます。

《スール・山形からの手紙》

吉岡はスール・山形からの手紙で、ミツはハンセン病ではなかったことを知りました。ミツは『人が嫌がるこんな世界から出ていこうとせず、ここで働かせてほしい』と言って、病院に戻ったと書いてありました。スール・山形はミツの気持ちを一時的な衝動か、感傷のように考えました。しかし、人件費を節約しなければ国の援助だけではやっていけない病院の事情もあり、ミツの申し出を受け入れました。

ミツは、大好きな流行歌を歌いながら患者さんたちのために働きました。病院では月に一度、映画館からフィルムを借りて映画を見ることがありました。日曜日にはミツひとりで御殿場に出て、自分の好きな映画を観られるのに、『だって。患者さんたちは映画、ほかの場所では見られないんでしょ。あたし一人で行けば … 行けない患者さんたちに可哀想だもん。』、『一人で行ったってさ、患者さんたちのこと気になって … 詰んないんだもん。』と言って、決して行くことはなかったといいます。

そんなミツの姿を見たスール・山形は書きます。

『我々修道女の言葉に、愛徳の実践というものがあり、この愛徳の実践に、修道女は生きようと心がけておりますが、愛徳は感傷でも、憐憫でもございません。私たちは、悲惨な人や気の毒な方を同情しますが、同情は、本能や感傷にすぎず、つらい努力と忍耐のいる愛ではない、と教わってまいりました』。だからこそ、ミツの「病院に残りたい」という気持ちを感謝しつつも、一時的な感傷であり、憐憫であると考えたのでした。しかし、『ミッちゃんは … 努力や忍耐を必要としないほど、苦しむ人々にすぐ自分を合わせられるのでした』。『彼女の場合には、愛徳の行為にわざとらしさが少しも見えなかったのです』。

吉岡とのデートの時、小児麻痺を患った過去を知り、「可哀そう … 」という感情を抱き、最終的には身体を与えてしまったミツ（第 5 回掲載）。大嫌いな田口さんの奥さんがお金に困っていると、黄色いカーディガンと吉岡へのプレゼントを買うために残業を繰り返して得たお金を差し出したミツ（第 10 回掲載）。そんな彼女は、病院でも〈他者の苦しみに寄り添う心〉をもって、患者さんたちのために働いていたのです。

広石廉二氏は『吉岡の憐憫の情が強者の高みから弱者を見下ろすときに生ずる感情であるのに対して、ミツのそれは**弱者が強者と弱者の区別なく、その哀しみに共感せざるを得ない感情**なのである』と書いています。

《汝（なんじ）、幼児（おさなご）のごとく非（あら）ずんば … 》

スール・山形は続けます。

『「汝、幼児のごとく非ずんば」という聖書の言葉がどういう意味か、私にもわかります。（中略） 「伊豆の山々、日がくれて」という流行歌が好きで、石浜朗の写真を、自分の小さな部屋の壁にはりつけている平凡な娘、そんなミッちゃんであればこそなお、神はいっそう愛し給うのではないかと思ったのです』。

『汝、幼児のごとく非ずんば』は、新約聖書『マタイによる福音書』に出てきます。弟子たちがイエスのところに来て、「だれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」と質問しました。イエスは一人の子供を呼び寄せて、彼らの中に立たせて言います。

『心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである』。（18 章 3 ～5 節）

山浦玄嗣(はるつぐ)先生の〈ケセン語訳〉にすると、こうなります。

『心をスッパリ切り替えて、誰からも一人前扱いされないこんな洟垂れ小僧と同じようにならなければ、どうしたって神さまのお取り仕切りには入れないぞ。頭を下げ、腰を低くしてへりくだり、おのれがことを半人前にも足りないこの子供と同じだとする者は、神さまのお取り仕切りでは誰よりも偉いんだ。お取り仕切りを預かるこの俺の言うことをシッカリと守って、取るにも足らないこんな洟垂れ小僧の一人にでも腰を低くして、さあ、どうぞ、そうぞと、我が家にお迎えするような者は、この俺のこともそうやって迎えるはずだ』。

修道女の手紙は続きます。
『私たちの神は、だれよりも幼児のようになることを命じられました。単純に、素直に幸福を悦ぶこと。単純に、素直に、悲しみに泣くこと。 ― そして、単純に、素直に愛の行為ができる人。それを幼児のごときと言うのでしょう。』

幼児は、なんの先入観も偏見もなく、自分に声をかけてくれるひとを見つめます。そして前回ご紹介した武田なほみ先生の文にもあったように、〈単純な信頼〉をもって目の前のひとにかけ寄ります。そして、その人の心を開いてくれます。ミツはまさに、この〈幼児〉のような女性なのです。イエスは、このような人こそ「天の国」にふさわしく、「わたしを受け入れる」ことができると言います。

私たちはミツという女性を知れば知るほど、「彼女のように人のために尽くせる人間になりたい」、「ミツのような生き方ができれば、つまらない争いや憎しみが減るのになぁ …」と思うのではないでしょうか。しかし、現実に目を向ければ、その想いは「夢物語」あるいは「理想」という言葉でかき消されてしまうことがほとんどでしょう。「そんなことをしていたら、世の中から取り残されていくだけさ」……。そう思わざるをえない〈競争社会〉・〈強者優先〉の世界の中にわたしたちは放り込まれているからです。
では、私たちはイエスのことばを、ただの「理想」として受けとることしかできないのでしょうか？　「こう生きたい」という自分の人生の目標や、「これがあるべき本当の在り方だ」という自分が信じる生き方が、厳しい現実に押しつぶされて跡形もなく消え去るのを黙って見ていていいのでしょうか？
神を、イエスを信じている人たちは、その現実に対して「いいえ！」という〈返事〉と〈生き方〉を選んで、イエスに支えられ、導かれながら歩んでいる人間と言えます。
患者さんたちのために生きることに決めたミツ。その彼女に起こった考えられない出来事 …。私たちはその前で立ち止まり、吉岡とともに人生の意味を考えることになります。次回へ。

【引用・参考にした書籍】　・遠藤周作　『わたしが・棄てた・女』
・山浦玄嗣『ガリラヤのイェシュー』　・広石廉二『遠藤周作のすべて』
・日本聖書協会　『聖書　新共同訳』